

重松 幹二（工）、高山 峯夫（工）、佐藤 研一（工）、木原 秀樹（福岡市消防局）、高橋 淳夫（読売新聞社）、松井 渉（日本気象協会）、小畑 和彦（福岡市防災危機管理課）、辰巳 浩（工）、伊藤 豪（商）、黒岩 中（元医）、岩永 和代（医）、矢守 克也（京都大学防災研究所） 期別：後期 単位数：2 開講年次 1

- - - 授業の到達目標等 - - -

- - - 授業計画 - - -

この講義では、防災に関する基礎知識を学ぶことにより、災害から自分や家族を守る術、被害を最小にする準備と対応方法を修得する。特に、

- ・自助（自分や家族の命はまず自分たちで守らなければならない）
- ・共助（被災した近所の人を助けることの重要性）
- ・公助（公的機関による救援行動の大災害時における脆弱さ）

の考え方を柱とし、各トピックスを理解することで、一生涯役に立つ教養を身に付けることができる。

[災害から自分を守る]

- 1．防災意識の必要性、自助・共助・公助（重松幹二）
- 2．過去の大震災や風水害からの教訓（高山峯夫）
- 3．ライフラインの被害想定と断絶時対応（佐藤研一）
- 4．個人の平常時の準備と災害時対応（木原秀樹）

なお、この科目は「福岡大学防災士養成研修プログラム」の基幹科目となっている。工学部・商学部・経済学部の学生は、他の指定科目も受講することで、日本防災士機構が認定する「防災士」の受検資格を得ることができる。詳細は工学部事務室に問い合わせること。

[災害の状況を知る]

- 5．災害に対する報道機関の取り組み（高橋淳夫）
- 6．気象予報、警報・注意報（松井渉）
- 7．最近の自然災害（松井渉）

- - - 授業の概要 - - -

[地域を守る]

- 8．地域の防災活動、自主防災組織、消防団活動（木原秀樹）
- 9．防災関係機関の対応（小畑和彦）

平成7年の阪神・淡路大震災、平成23年の東日本大震災と、甚大な災害が国内で発生した。一方福岡では、平成11年および15年には御笠川氾濫における博多駅周辺の水害、平成17年には福岡県西方沖地震が発生し、安全とされていた福岡市内でも日頃から災害に対して高い注意意識が必要であることが明らかとなった。また、将来関東・東海・関西などに就職する学生にとっても、大学で防災・減災に関する知識を身に付けておくことは極めて重要である。

[災害と社会システム]

- 10．被災社会の多様性（高橋淳夫）
- 11．都市災害、都市防災計画・技術、災害と交通（辰巳浩）
- 12．災害と損害保険（伊藤豪）

本講義は、各学部のスタッフおよび福岡市役所・消防局・各種報道機関を講師としたオムニバス形式で進められ、文系理系両側面から防災に関する知識を広く得ることに特徴がある。

[いのちを守る]

- 13．災害医療、トリアージ、高齢者・乳幼児対応（黒岩中、岩永和代）
- 14．災害心理、被災者の行動意識（矢守克也）
- 15．防災活動の必要性（重松幹二）

- - - 事前・事後学習(予習・復習) - - -

学習期間中は災害に関する新聞記事やニュースに注意を払うとともに、背後でどのような出来事が発生しているか、どのように対応すべきかなどを想像しながら学習を進めて欲しい。なお、毎回行う小テストの正答は、解答締切後にFUポータルを利用して配布するので、事後学習に役立てていただきたい。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

講義終了後、毎回FUポータルを利用して小テストを実施し、到達度を評価する。単に出席しただけでは評価しない。
定期試験(70%)と毎回行う小テスト(30%)を総合して最終成績とする。

- - - テキスト - - -

プリントを配布する。

- - - 履修上の留意点 - - -

緊急時には対策本部や災害現場に出動しなければならない講師が多いため、急な休講や講義順が変更となる場合がある。休講となった場合は補講を行うので、掲示板に注意すること。